



# 分割話



川崎ゆき

「何もしたくない日がありますねえ」

「毎日ですよ」

「あ、そう」

「でも、結局はやってますよ。やはり何かをやってないと退屈でしょ」

「本来やるべきことをしないで、他のことをやったりします。だから何もしたくないわけではなく、いやな用事をしたくないだけです」

「それは誰でもでしょ」

「大事な用事でも、後回しにしたいくなります」

「はい」

「有為なことをやるには、それなりの気力必要なんです」

「有為な？」

「本来しなければいけないことです」

「例えば」

「挨拶に行かないといけません。その相手、面倒な人でねえ、合うのがいやだ。色々と要求してくるし、言い草も気に入らない。本来なら頭を下げるような相手じゃない」

「それが本来の用事ですか。有為な」

「そうです。ここを通過しないと、先へは進めない」

「じゃ、行けばいいじゃないですか」

「つつい後回しにして、もうそろそろ行かないと、遅いと言われそうです」

「簡単でしょ」

「気が進まない」

「遠いのですか」

「いや、電車ですぐだ」

「じゃ、電車に乗るところで、第一話にすればいいのです」

「い、一話」

「電車に乗るだけです。だから、駅まで行くのが目的です。これはできるでしょ」

「できますよ。駅まで行くのなら」

「分割すれば、簡単な事の集まりなんですよ」

「ほう」

「第二話は電車車内で座れるかどうか、つり革があるかどうか、これは時間帯によって違うでしょ」

「それはいいが、その電車に乗ることは、先方のところへ行くということになるのでねえ」

「いや、そうじゃなく、降りる駅まで行くのが目的なんです。これで二話です」

「何ですか、それは」

「無事に目的地の駅まで行けるかどうか、その二話目です。これはこれで完結します。降りた駅から先は第三話目になります」

「ほう」

「駅から遠いのですか」

「歩いてすぐの雑居ビルだ」

「じゃ、その雑居ビルまでの話が第三話目です。まずは雑居ビルに辿り着けるかどうかです」

「行けるに決まっている。何度も行った場所だ」

「でも、その間、何かのトラブルに巻き込まれたり、道を間違えたりするかもしれませんよ。それに知り合いとばったり出会うとかもあります。無事に辿り着けるとは限りません」

「しかし先方と会うのが目的なので、やはり気が乗らん」

「雑居ビルへ行くのが目的なんです」

「駅と同じか」

「そうです。それで、雑居ビル内の話が第四話目になります」

「四階建ての小さなビルだ。先方の事務所は二階にある。これは階段で上がる」

「そのドアを開けるまでが第四話目です。ドア前まで辿り着くだけの話ですよ」

「まあ、そうだが」

「その相手はいますか」

「ああ、いる時間に行くからね」

「いつもどんな感じですか。会うときは」

「ノックしないで、ドアを開ける。すぐにけち臭い応接セットがあつてね。来客用だ。その後ろに衝立があつて、事務所になっている。事務員が二人いる。奥の窓際に彼はいる」

「そのあとの話は私には分かりませんが、想像では応接セットで面会するわけですね」

「そこで色々と礼を言ったり、頼んだりする。すると、イヤミを言われたりする。彼は要求を呑むはずだが、意地悪をする。それがいやなんだ」

「その意地悪をされるまでの間に、何かいろいろあるでしょ。お茶が出てくるとか」

「ああ、お茶ぐらい出るよ。コーヒーだがね」

「だからいきなりイヤミを言われたり、意地の悪いことを言い出すわけじゃないでしょ」

「まあ、そうだが」

「いやなシーンはほんの一瞬ですよ」

「その一瞬があるから、行きたくない」

「はいはい」

「応接セットで、お茶を飲む。あ、コーヒーでしたか。だから、コーヒーを飲みに行くのです」

「また分割か」

「はい」

「話を割って軽くするのはいいが」

「軽いどころか、駅まで行くだけ、電車に乗るだけ、雑居ビルまで行くだけ、応接セットでお茶を飲むだけ。全て軽いですよ。難しい話じゃないでしょ」

「用件が難しい」

「割ればいい。分ければ、分割すれば」

「だから、支払いの分割をお願いに行く用件なんだ。分割分割と何度も言われると、ドキッと  
する」

「じゃ、もう既に分割話でしたか」

「ああ」

了